

植 物 園 北 遺 跡  
発掘調査報告書

2020年3月

株式会社 地域文化財研究所

## 例 言

1. 本書は、京都市北区上賀茂松本町 96-1 において、株式会社アマタが計画した老人ホーム建設工事に伴い、株式会社地域文化財研究所が小田裕美設計事務所より委託を受け、実施した発掘調査の報告書である。（京都市番号：19S012）
2. 上記の調査は、建物建設範囲の内、144 m<sup>2</sup>を対象として令和元年 10 月 7 日から同年 11 月 19 日まで現地調査を行った後、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。
3. 本遺跡の現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導と、検証委員会の学識経験者として龍谷大学文学部歴史学科教授 國下多美樹氏、近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 網伸也氏に委嘱し調査指導をいただいた。
4. 上記事業に関する発掘調査担当者は福永信雄、影山美智与、江崎周二郎である。  
本書の執筆は、福永の指導のもと影山・江崎が行った。
5. 本書掲載の遺物整理作業は、影山、江崎、須藤歩、阪田恭子、宮原温美、城愛希与が行った。
6. 現地作業については長谷坂一、菅野慎一、杉本哲、足立博、測量・機械掘削などについてはやましろ文化財株式会社に協力を得た。本報告書作成に際し、下記の方々にご指導、助言をいただいた。記して謝意を表します。

國下多美樹、網伸也、馬瀬智光、黒須亜希子、奥井智子、若林邦彦、伊藤淳史（敬称省略・順不同）

## 目 次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 位置と環境	1
	3. 調査経過	3
II	遺構	3
	1. 基本層序	3
	2. 遺構	4
III	遺物	8
IV	まとめ	12
	写真図版	

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

対象地は京都市北区上賀茂松本町 96-1 に所在する。一帯は植物園北遺跡の範囲内の中央部にあたる場所で、過去の周辺調査では竪穴住居をはじめとした遺構・遺物が検出されるなど、重要な調査成果が得られている。

当地における老人ホーム建設に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）により確認調査が行われた。その結果、GL-0.5 mの深度において黄褐色砂泥の地山を確認し、この上面で竪穴住居、土坑、溝を検出した。このため建設範囲の内、遺構が保護されず破壊される部分を対象として発掘調査の実施が指導された。調査は開発者、株式会社アミタが計画し、小田裕美設計事務所から委託をうけ株式会社地域文化財研究所が実施した。

## 2. 位置と環境（図1～3）

植物園北遺跡は、京都盆地の平野部の北端、鴨川と高野川が合流する地点の北西側に所在する。遺跡の規模は東西約2km、南北約1.5kmとされている。京都府立植物園の一部を含む北側一帯、鴨川左岸の上賀茂神社の周辺を頂点として南東に向かって緩やかに傾斜する扇状地上に位置する。遺跡範囲140万㎡を超えて広がる大規模な集落遺跡であり、京都市内でも最大級の遺跡の一つである。遺跡の北は本山・神宮寺山など標高130～170mの山々が画している。遺跡は昭和54(1979)～56(1981)年にかけて行われた下水道工事の際に発見された。以降の調査で弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺構を中心に、竪穴住居が多数検出されている。また遺跡の北西に接して上賀茂神社があり、やや離れた南東方向には下鴨神社が存在することから、古代カモ氏との関連が指摘されている。奈良・平安・鎌倉・室町の各時代の遺構も確認されており、大規模かつ長期間存在した集落遺跡である。



図1 調査地位置図 (1:2,500)



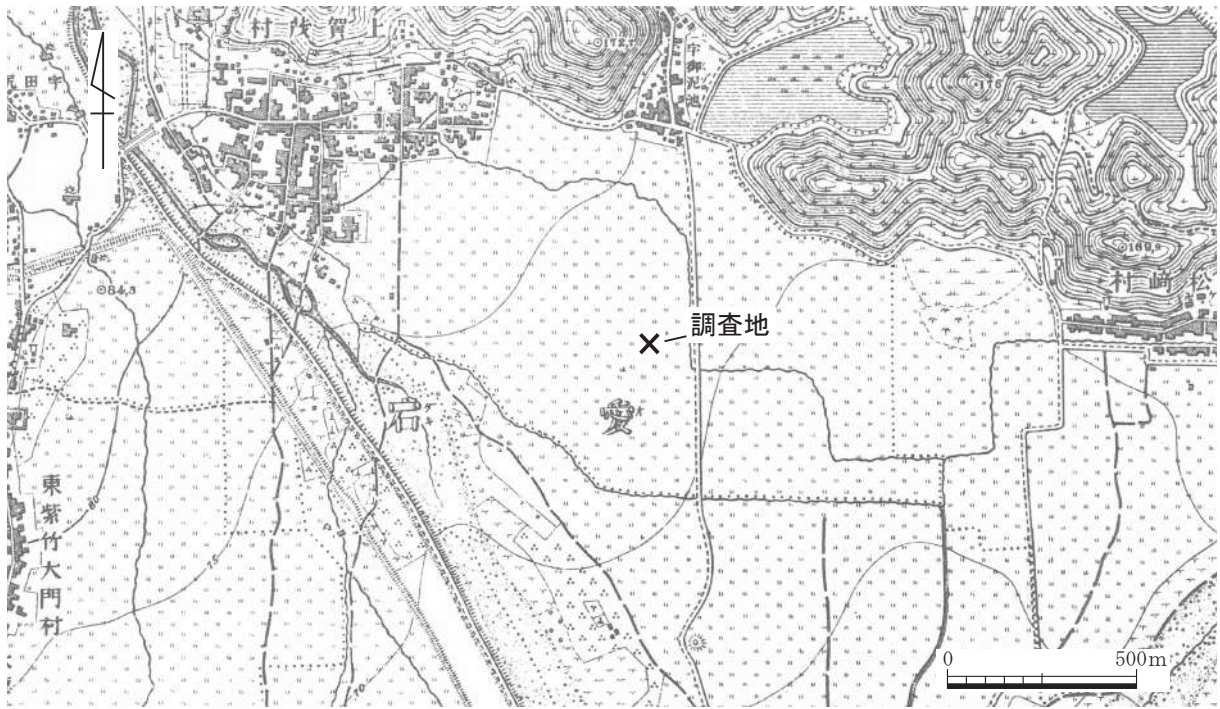


図2 地形図（「京阪地方仮製2万分1地形図」）



- |                  |                 |                |             |             |
|------------------|-----------------|----------------|-------------|-------------|
| 132-3 醍醐ノ森瓦窯跡    | 144 ケシ山遺跡       | 358-12 元稻荷瓦窯跡  | 364 岩倉忠在地遺跡 | 383 沖殿町遺跡   |
| 132-6 大深町須恵器窯跡   | 145 ケシ山古墳群      | 358-13 栗栖野瓦窯跡  | 367 八幡古墳群   | 384 一乗寺向畑遺跡 |
| 132-8 河上瓦窯跡      | 146 植物園北遺跡      | 358-14 円通寺瓦窯跡  | 368 一条山遺跡   | 387 渡辺館遺跡   |
| 132-10 大宮北山ノ前瓦窯跡 | 149 御土井跡        | 358-15 南ノ庄田瓦窯跡 | 369 東幡枝遺跡   | 435 月輪寺跡    |
| 138 上賀茂遺跡        | 151 西北町遺跡       | 358-16 南池田窯跡   | 370 幡枝古墳群   | 436 大雲寺跡    |
| 137 上賀茂中山町遺跡     | 358-5 中の谷窯跡     | 358-17 木野墓窯跡   | 371 西山古墳群   |             |
| 139 神館跡          | 358-6 木野窯跡      | 358-19 芝本瓦窯跡   | 372 三宅八幡城跡  |             |
| 140 神宮寺跡         | 358-8 はぶ池窯跡     | 358-20 本山遺跡    | 378 下鴨半木町遺跡 |             |
| 141 大田神社         | 358-9 小野瓦窯跡     | 358-22 深泥池瓦窯跡  | 380 林山古墳群   |             |
| 142 上賀茂本山遺跡      | 358-10 妙満寺裏庭瓦窯跡 | 358-23 ケシ山炭焼窯跡 | 381 松ヶ崎廃寺   |             |

図3 周辺遺跡分布図（1:30,000）

### 3. 調査経過 (図4)

調査地範囲は、開発対象地中央部分にL字形に設定し、東西に16 m、幅6 m、南北に12 m、幅8 mの範囲である。確認調査にもとづき、機械掘削により約G.L-0.5 mまで盛土を除去し、T.P.=72.2 mの地山上面で遺構を検出した。調査前、遺構検出、遺構完掘時に文化財保護課による随時検査、指導を受けた。また、検証委員による調査指導をいただいた。

調査は令和元年10月7日から開始し、同年11月19日に終了した。以下、調査経過の月日等を記す。

10月9日(水) 調査範囲設定、機械掘削開始。文化財保護課臨検。10月10日(木) 機械掘削終了、遺構検出。10月16日(水) 遺構検出写真撮影。文化財保護課臨検。10月17日(木) 遺構掘削。検証委員網氏指導。11月7日(木) 遺構掘削。検証委員國下氏・網氏指導。11月14日(木) 遺構完掘撮影のための清掃。11月15日(金) 遺構完掘写真撮影、測量。遺構掘削作業終了。文化財保護課臨検。國下氏指導。11月19日(火) 埋戻し、調査終了。

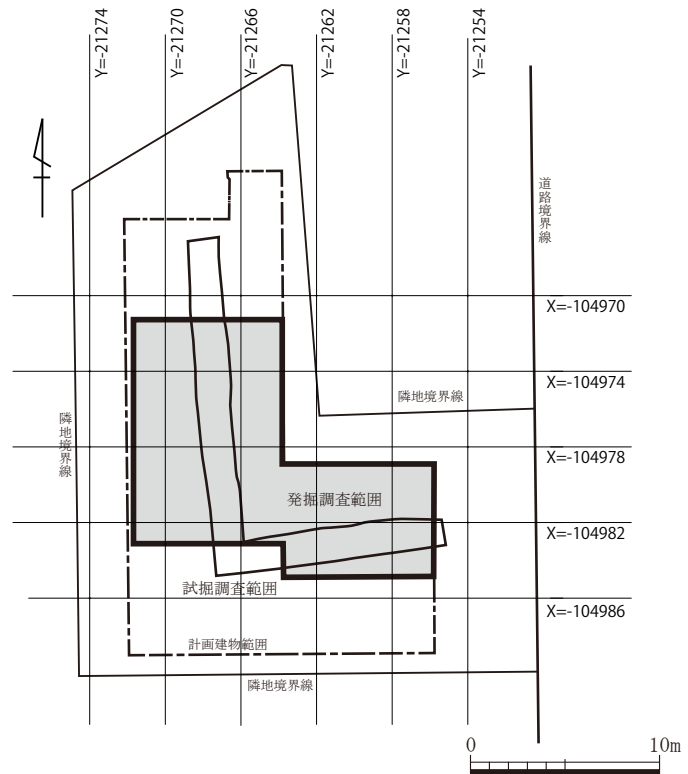


図4 トレンチ配置図 (1:400)

10月9日(水) 調査範囲設定、機械掘削開始。文化財保護課臨検。10月10日(木) 機械掘削終了、遺構検出。10月16日(水) 遺構検出写真撮影。文化財保護課臨検。10月17日(木) 遺構掘削。検証委員網氏指導。11月7日(木) 遺構掘削。検証委員國下氏・網氏指導。11月14日(木) 遺構完掘撮影のための清掃。11月15日(金) 遺構完掘写真撮影、測量。遺構掘削作業終了。文化財保護課臨検。國下氏指導。11月19日(火) 埋戻し、調査終了。

## II 遺構

### 1. 基本層序 (図5・6)

- 1層 現代の盛土、及び攪乱。
- 2層 旧耕土 層厚約0.2 m。調査区北側に残存する。
- 3層 床土 10YR4/2 にぶい黄褐色細砂混じりシルト。層厚約0.15 m。調査区北側に残存する。
- 4層 地山 10YR8/4 浅黄橙色細砂混じり粘土質シルト。南に向かって薄くなるが調査区全域で確認した。
- 5層 地山 5Y5/2 暗オリーブ色シルト。礫が多く混じる。4層の直下において調査区南側で確認した。

現地表面から層厚0.8 mに及ぶ攪乱は地山を部分的に深く削り込む状況であった。それ以前から耕作土と床土が地山を削平しており、遺構が検出できたのは地山直上においてのみであった。地山の検出高はT.P.=72.2～73.0 mで西側に高く、溝19を境に削平を受けて東に向かって低くなる様相を呈していた。



## 2. 遺構 (図5～9)

調査では古墳時代初頭(庄内式期)のものと時期不明の遺構を検出した。検出した遺構はピット38基・溝6条・建替えが認められる竪穴住居2棟である。以下に主要な遺構を報告する。

**竪穴住居1** (図8) 調査区の北西部にあり、地山上面で検出した。平面形は6.7×6.5mの方形で、南北の中軸は北に対して西に約35度振る。検出面から床面までの深さは0.45mを測る。北東部を現代のコンクリート製の雨水枡に切られるが、非常に良好な遺存状態であった。住居の床面では周壁溝及び一部で貼り床を検出した。貼り床を除去した面には一回り小さい竪穴住居の周壁溝があり、拡張と建替えがなされていることがわかった。旧住居の周壁溝は幅0.15～0.25m、断面形はV字形を呈し、深さは約0.1～0.2mであった。より大形の新住居の床面南側では、この古い周壁溝の上に黄褐色細～中粒砂混じりシルトを用いて厚さ0.03m～0.05mの貼床を行っており、古い段階での凹凸の補整を行うことが目的と思われる。逆にこれ以外に貼り床はみられず、地山面をそのまま活かしたほとんど貼り床のない住居であったと思われる。

新住居の周壁溝は幅約0.1～0.2m、断面形はV字形を呈し、深さは約0.1～0.2mであった。主柱穴は4基検出した。一部は貼床が被り掘方の判別ができず、床面を断ち割ることで確認した。掘方の直径は0.35～0.45m、柱痕の直径は0.15～0.2m、深さは約0.4mであった。主柱穴37からは拳大の自然礫とともに遺物41・42が出土した。根石に使ったものではなく、住居廃絶の際に主柱穴の埋土の上面に置かれた状況であった。主柱穴39にも自然礫を用いた同様の状況が見られた。建物のほぼ中央では円形の炉と思われるピット40を検出した。直径0.3m、深さ0.26mを測る。炉堤や焼土塊などはみられなかったが、壁面に熱を受けて赤変する部分があった。住居の拡張に伴う主柱穴、炉の作り替えは確認できなかった。旧来の柱穴と炉を使用し、壁面だけを削って住居を拡張した可能性がある。床面上には貼付く形で数点の土器が出土した。古墳時代初頭(庄内期)のものである。

**竪穴住居2** (図9) 調査区の南東にあり、地山上面で検出した。深さは0.08m、上部は削平されており、西半部は溝19に切られ、近現代の攪乱により南半部は不明瞭となる。残存する南北幅は3m、東西3.2m、主柱穴は検出できず、炉と思われるピット20、周壁溝28がわずかに残る。ピット20は直径0.6m、深さ0.1mを測る。周辺部には比熱・赤変がみられた。溝28は幅0.15m、残存長0.9m、深さ0.08mを測る、東に湾曲するV字形の断面形をもつ溝である。削平された住居の周壁溝と思われる。ピット20と近接するが位置にずれがあり、同一の場所で時期の異なる住居が重複している状況が

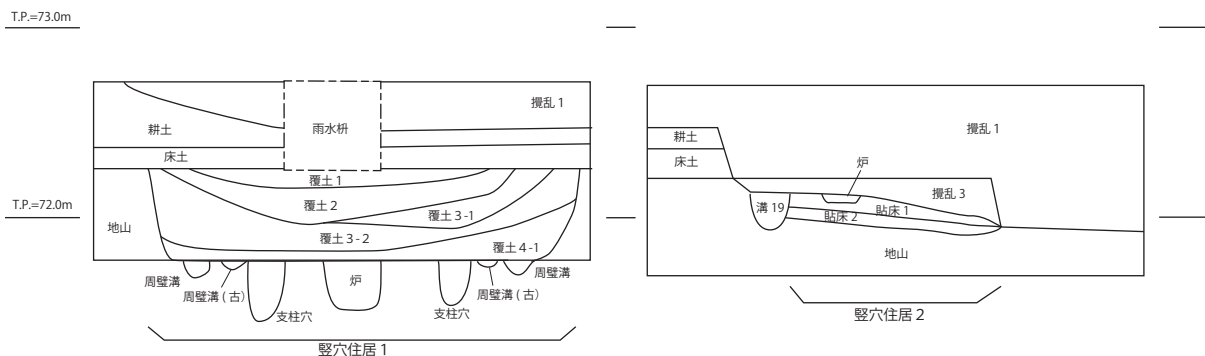


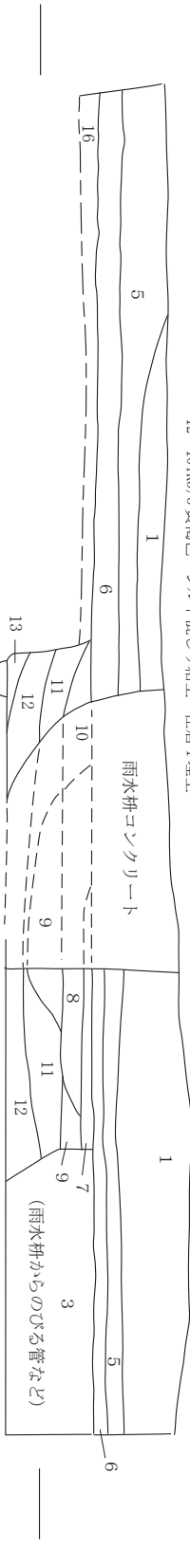
図5 竪穴住居1・2土層断面模式図

T.P. = 7.3m  
W  
土層①



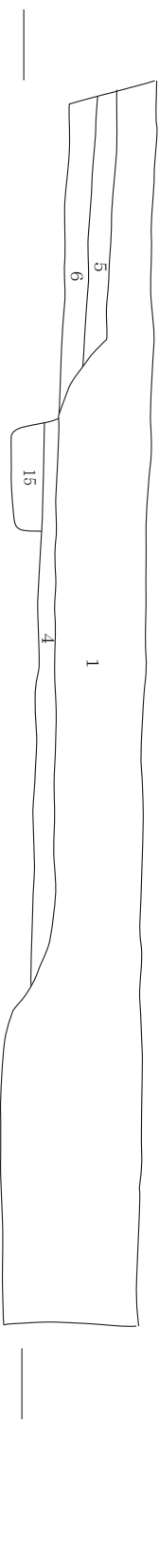
T.P. = 7.2m  
W  
土層②

- 1~4 近現代擾乱
- 5 耕土
- 6 床土
- 7 10YR3/2 黒褐色 細～中粒砂混じり粘土 住居1埋土
- 8 10YR3/3 暗褐色 中粒砂混じり粘土 住居1埋土
- 9 7.5YR3/2 暗褐色 シルト～中粒砂混じり粘土 住居1埋土
- 10 10YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂混じり粘土 住居1埋土
- 11 10YR5/4 に近い黄褐色 シルト混じり粘土 住居1埋土
- 12 10YR5/6 黄褐色 シルト混じり粘土 住居1埋土



T.P. = 7.3m  
W  
土層③

- 13 10YR6/6 明黄褐色 細粒砂混じり粘土 住居1埋土
- 14 10YR5/6 黄褐色 シルト混じり粘土 地山/ロツク含む 住居1周壁溝
- 15 5Y2/1 黒 中～粗粒砂混じり粘土 溝19埋土
- 16 10YR5/4 に近い黄褐色 シルト混じり粘土 地山



T.P. = 7.3m  
W  
土層④

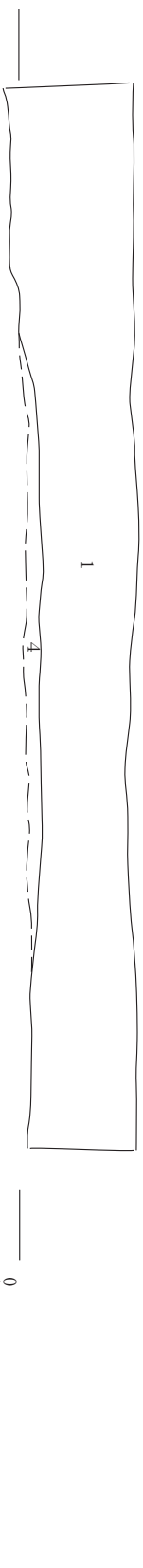


図 6 調査区土層断面図 (1 : 40)

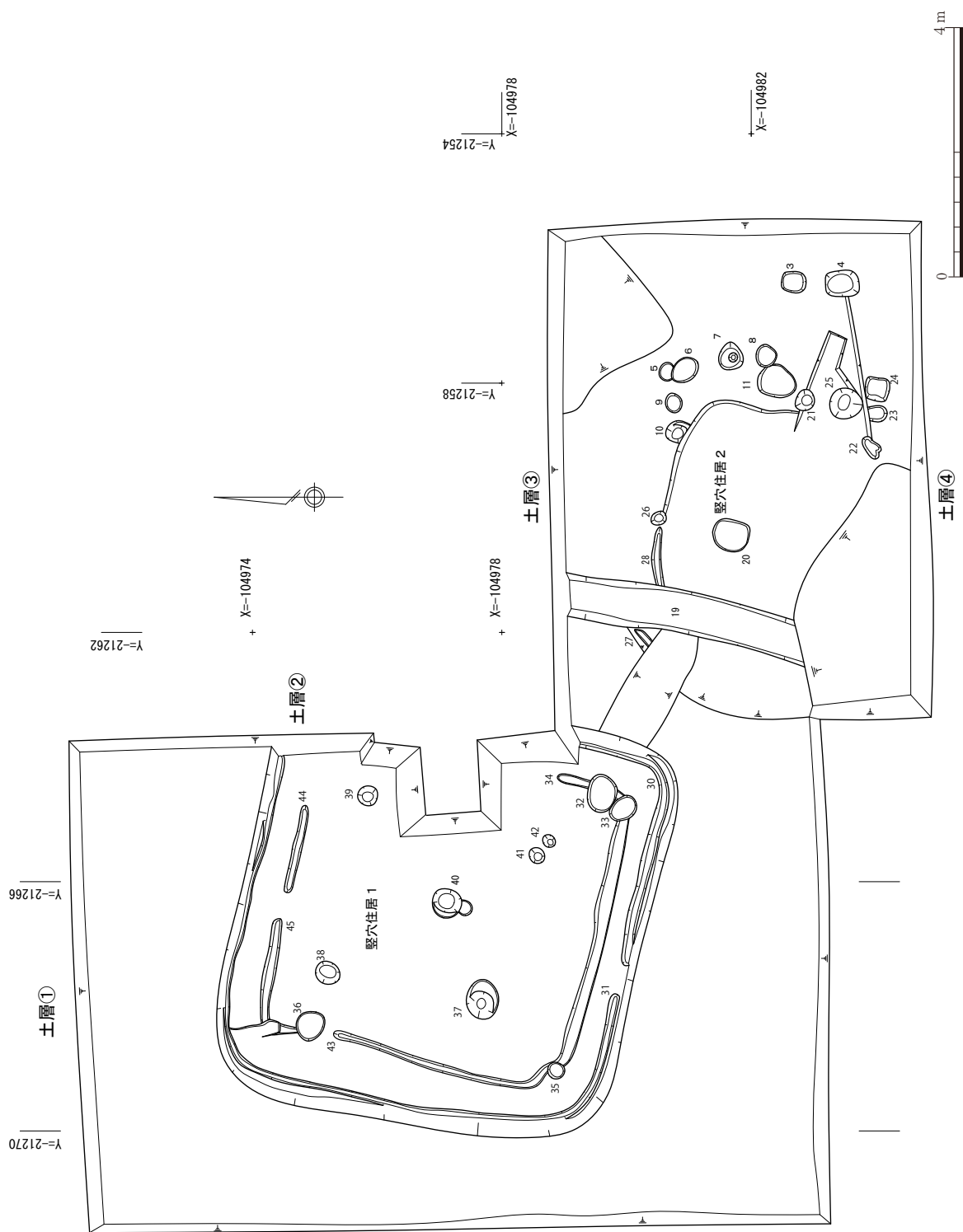


図7 検出遺構平面図 (1 : 100)



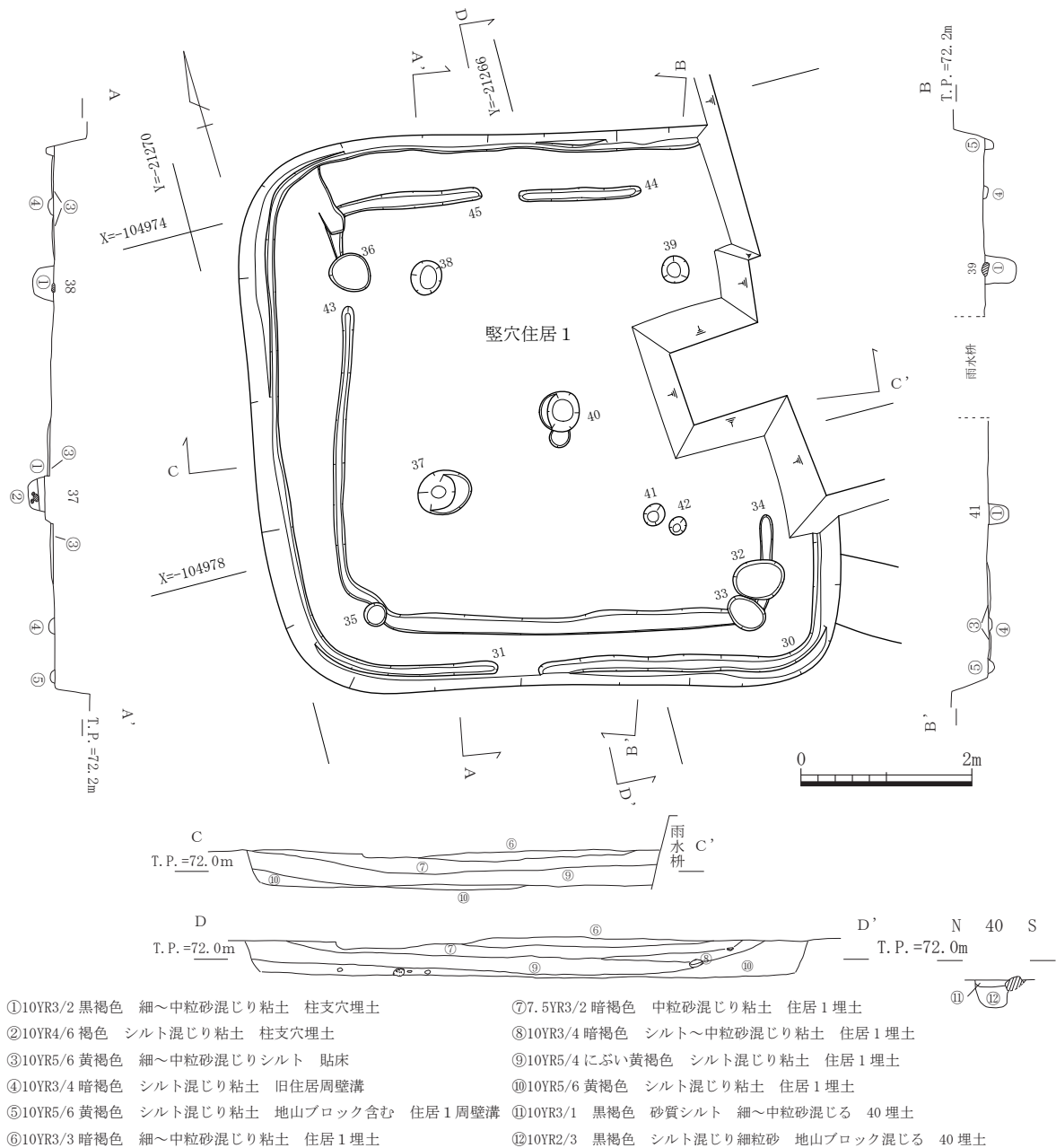


図8 竪穴住居1実測図(1:80)

見られた。

埋土底面付近で出土した土器は小片であったが、高杯脚部の形状から弥生時代後期末(庄内式期)の範疇に収まると思われる。

ピット3～11 直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る、灰褐色砂質土を埋土とする遺構群である。調査地の東側にみられた遺構で、掘方の平面形が方形を呈するものがあり今回検出した他の遺構とは埋土が異なっている。埋没の時期差によるものと思われる。遺物は出土せず時期は不明であるが、付近の調査で奈良・平安時代の遺構が検出されており、掘方の形状からみてこれらも同時代のものである可能性がある。

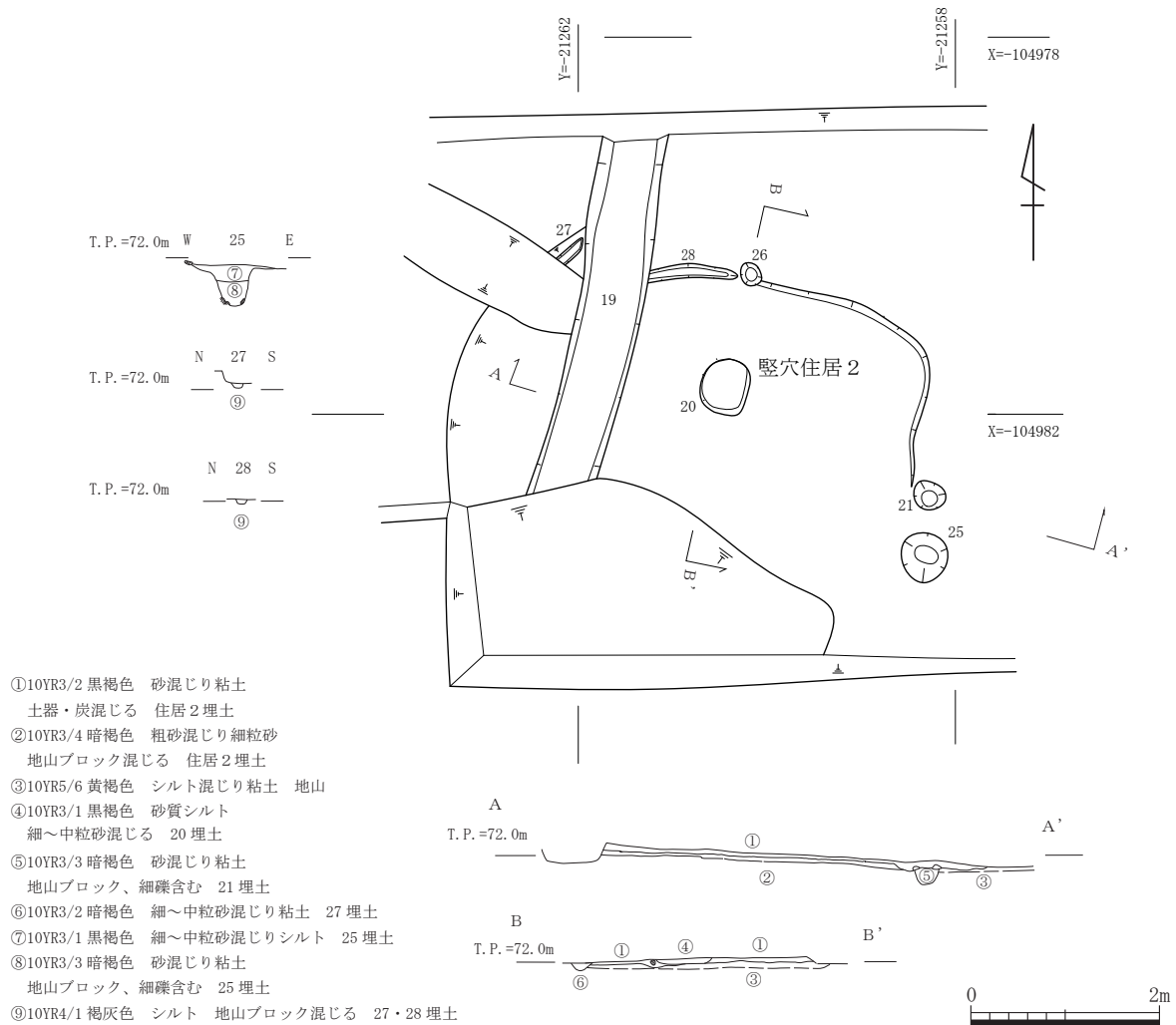


図9 竪穴住居2実測図 (1:80)

### Ⅲ 遺物

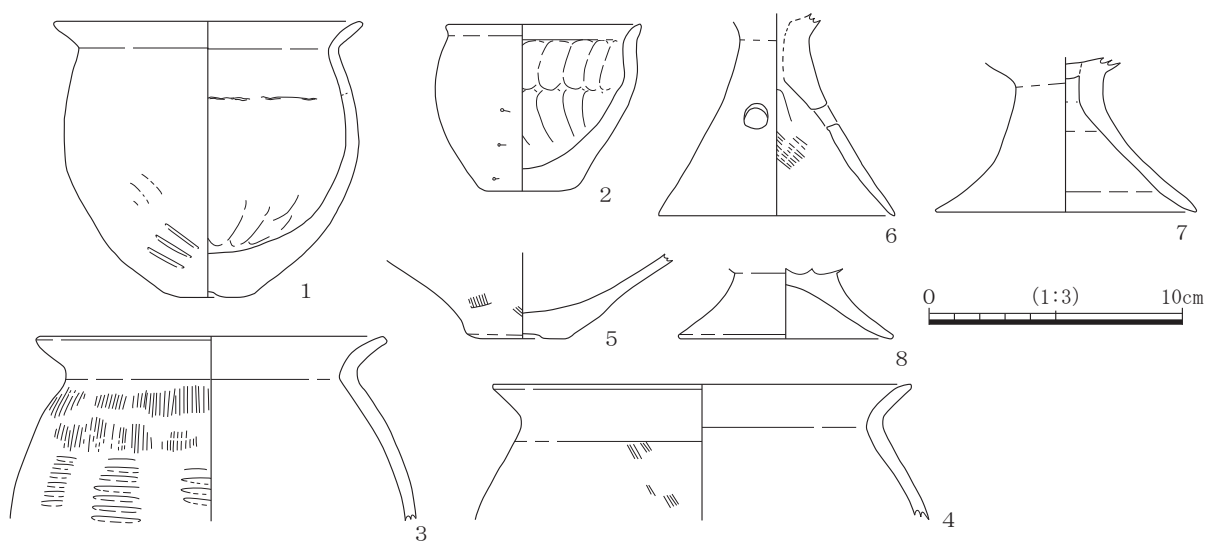
遺物はコンテナ約4箱分が出土した。土師器（庄内Ⅱ～Ⅲ式）、石器などである。

**竪穴住居1床面出土土器** (図10) 1～8は竪穴住居1の床面から出土した。1は小形の鉢である。底部は中央が小さくくぼみ、体部は内湾して立ち上がる。中ほどに最大径をもつ。口縁部は外方に短く折れ曲がる。口縁端部および体部の調整は摩滅が激しく不明瞭であるが体部外面はタタキ、内面はナデにより仕上げられている。2は小形の鉢である。平らな底部から立ち上がる体部は上半に最大径をもつ。口縁端部はヨコナデにより短く外反する。体部外面はケズリ、内面はナデにより仕上げる。3は甕である。体部上半は内湾して膨らみ、口縁部は外方にくの字に折り曲げられ、やや外反する。口縁端部はヨコナデにより面をもつ。体部外面はハケのちタタキ、内面は風化により調整不明である。4は甕である。体部上半は内湾して膨らみ、口縁部は外方に折れ曲がる。端部はヨコナデにより丸く収められる。体部外面にハケが残る。5は壺の底部である。底部は上げ底を呈し、中央がわずかに窪む。体部下半外面にハケが残る。6は高杯の脚部である。円孔の透かし孔を三方にもつ。脚部はハの字状に開き、脚裾端部はヨコナデにより丸く仕上げる。外面は風化のため調整は不明瞭。内面にわずかに

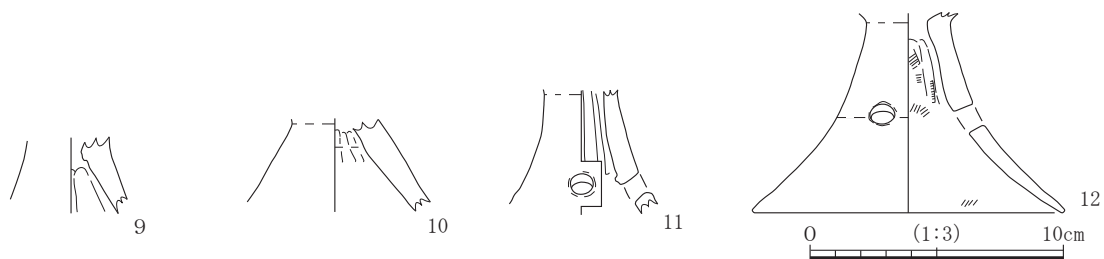
ハケが残る。7は高杯の脚部である。円板充填により杯部底面をつくりだす。外反して開く脚裾部は端部をヨコナデにより丸く収める。外面は風化により調整不明、内面はナデにより仕上げられる。8は台付鉢の脚部である。ハの字に開く脚部の内外面は風化により調整不明、端部はヨコナデにより丸く収められる。

**竪穴住居2埋土内出土土器** (図10) 9～12は竪穴住居2の埋土内より出土した。9は高杯脚柱部である。内外面風化のため調整不明。10は高杯脚部である。ハの字形に開く裾部の内外面は風化のため調整不明。内面にわずかにシボリ目が残る。11は高杯脚柱部である。三方に円孔による透かし孔を施す。外面はナデ、内面は横方向のケズリが残る。12は高杯脚部である。円形の透かし孔が1孔のみ残る。全体が赤変・風化しており、廃棄後に被熱を受けたものと思われる。外面は風化により調整不明、内面にシボリ目とハケが残る。

**竪穴住居1埋土内出土土器** (図11) 13～40は竪穴住居1の埋土内より出土した。13は器台口縁部である。杯部上半は外反気味に斜め上方にのびる。摘まみ上げて面を持たせた口縁部には外面に円形浮文が施される。口縁端部はやや外反し、ヨコナデにより丸く収められる。内外面ともにミガキにより仕上げられる。14～23は甕である。14は内湾する体部を持ち、口縁部はくの字に屈曲する。口縁端部はヨコナデにより丸く納められる。体部外面に斜め方向のハケを施す。内面の調整は風化により不明である。15は屈曲して外上方に短く開く口縁部である。口縁端部は丸く収められる。内外面の調整は風化により不明。16は屈曲し、やや外反して開く口縁部である。口縁部外面に縦方向のハケ、内

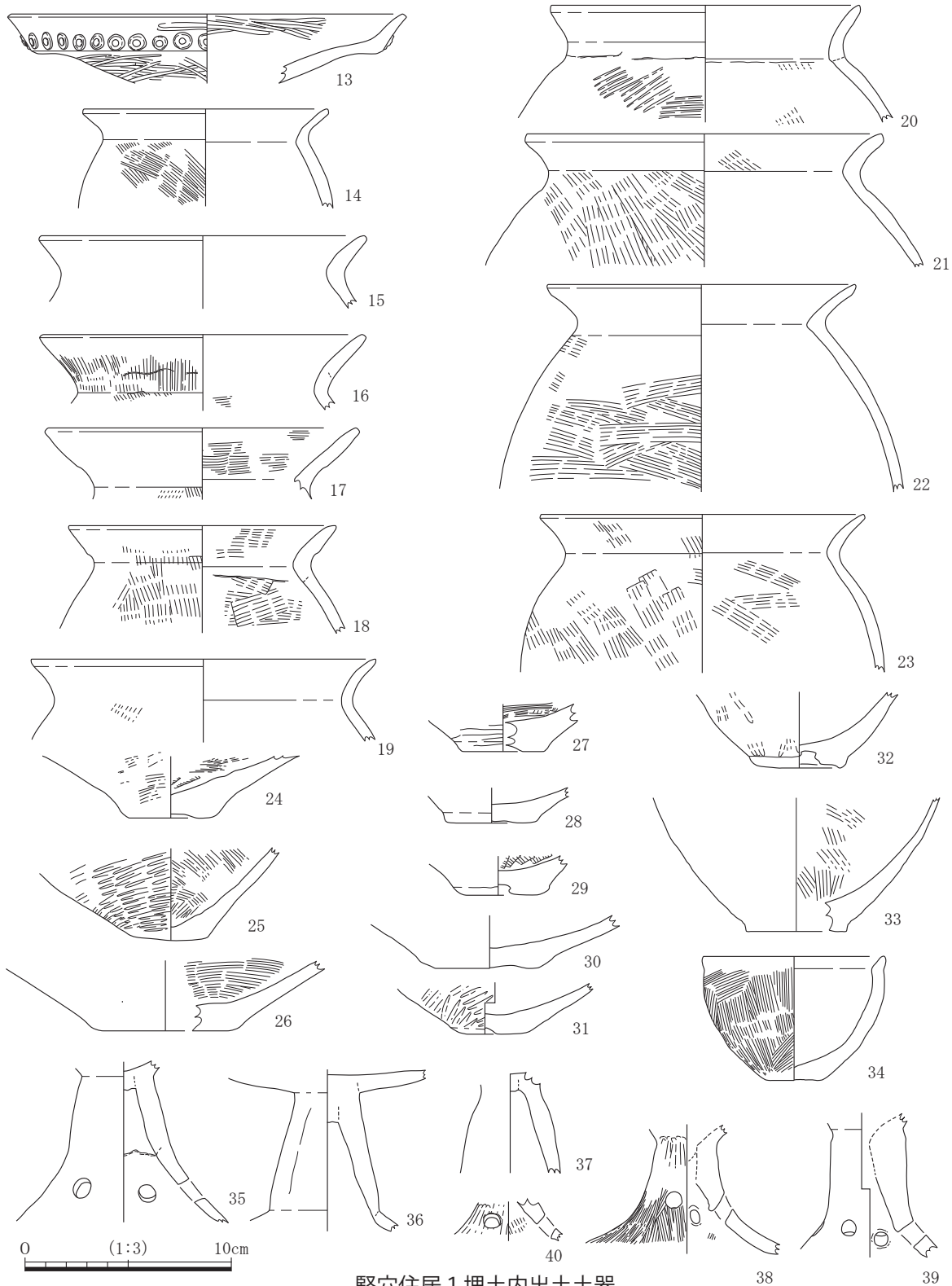


竪穴住居1床面出土土器



竪穴住居2埋土内出土土器

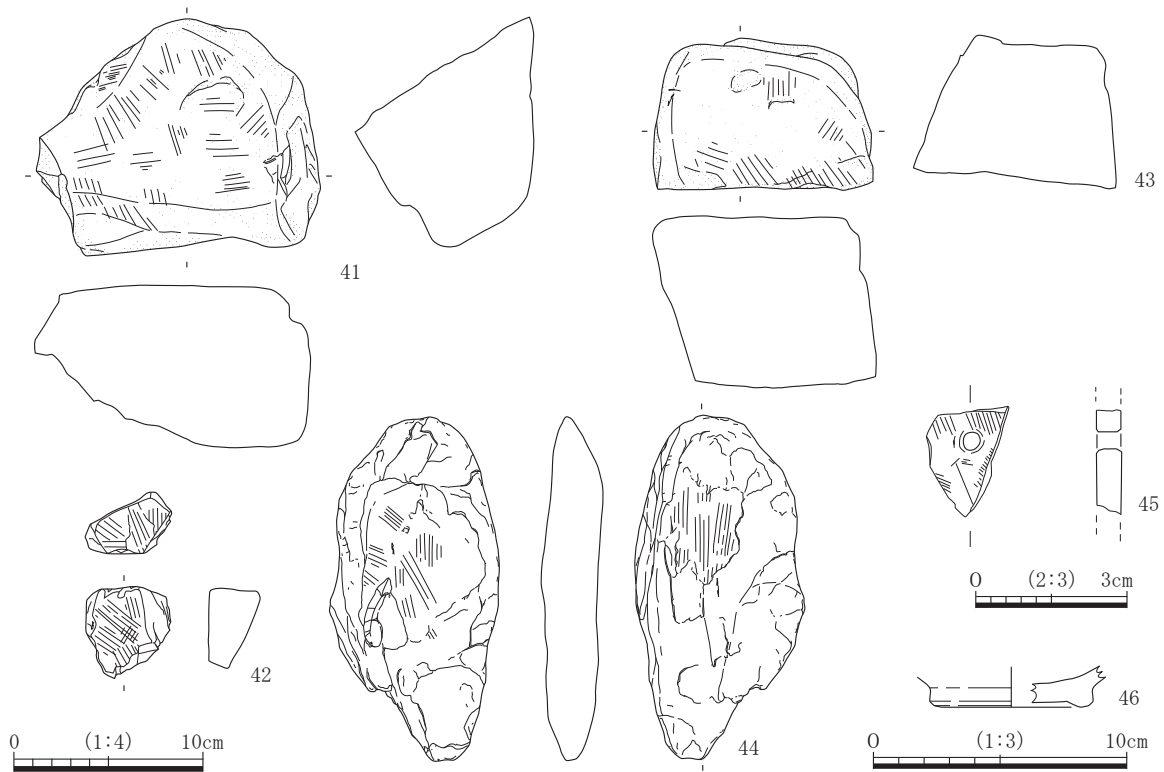
図10 出土遺物実測図(1)



竪穴住居 1 埋土内出土土器

図 11 出土遺物実測図 (2)

面に横方向のハケがわずかに残る。口縁端部はヨコナデにより面を持つ。17 は外上方に開く口縁部である。体部外面には縦方向のハケ、口縁部内面には横方向のハケが施される。口縁端部はヨコナデにより面を持つ。18 はやや内湾する体部から屈曲して開く口縁部を持つ。頸部外面の屈曲はナデにより



竪穴住居 1 埋土・支柱穴 37 出土石器および攪乱出土遺物

図 12 出土遺物遺物実測図 (3)

にぶくなる。体部外面には縦方向のハケ、体部から口縁部内面には横方向のハケを施す。口縁端部はヨコナデにより丸く収める。19はヨコナデによりやや外反気味に開く口縁部である。端部は丸く収める。内外面ともに風化が激しく調整は不明。体部外面にわずかにハケが残る。20は内湾して開く体部に、外上方にわずかに開く口縁部を持つ。頸部外面の屈曲はナデにより鈍くなり、体部外面にはタタキ、内面にはハケが施される。口縁端部は摘まみ上げ気味で、ヨコナデによりわずかに面を持つ。21は内湾して開く体部を持つ。口縁部はくの字に屈曲し、外反して開く。頸部外面はナデにより屈曲が鈍くなる。体部外面ハケ、口縁部内面にハケ後ナデを施す。口縁端部はヨコナデにより面を持つ。22は内湾する体部を持ち、口縁部はくの字に屈曲して外方に開く。口縁端部は摘まみ上げ気味である。体部外面に横方向のハケを施す。内面は風化により調整不明である。23は内湾する体部に屈曲して外上方に開く口縁部がつづく。体部内外面、口縁部外面にはハケを施す。口縁端部はヨコナデにより丸く収める。24～33は壺または甕の底部である。24は中央部が窪む上げ底の底部から、外上方に開く体部が続く。内外面にハケを施す。25は平底の底部から外上方に開く体部がつづく。体部外面はタタキ、底部から体部内面はハケが施される。26は壺である。平底の底部を持つ。緩やかに開く体部は外面が風化の為に調整不明、内面にハケを施す。27は上げ底の底部を持つ。外面はタタキ、内面はハケが施される。28は中央がやや窪む。29はドーナツ底の底部である。外面は風化のため調整不明、内面にはハケが施される。30はわずかに上げ底気味の壺底部である。内外面ともに風化のため調整は不明。31は中央からやや偏った部分が窪む。外面はタタキが施される。内面は風化のため調整不明。32はドーナツ底の底部である。体部外面にミガキが施される。内面は風化により調整は不明。33は底部から内



湾して開く体部が立ち上がる。体部外面は風化のため調整不明、内面はハケにより仕上げられる。34は小形の鉢である。平底の底部から内湾して開く体部をもち、口縁端部はヨコナデによりわずかに屈曲する。体部外面はハケ、内面はナデで仕上げられる。35～39は高杯である。35は円孔の透かし孔が二孔残存する。杯部との接合には円板充填法が用いられている。36・37は内外面ともに風化のため調整不明である。38は円孔の透かし孔が四孔施されており、脚柱部外面にはミガキ、裾部外面にはハケが施される。39の裾部には円形の透かし孔が四孔配される。40は器台である。中空の脚柱部はハの字に開き、円孔の透かし孔が二孔残存する。外面はミガキ、内面はハケが施される。脚部の丈が短く、器台と判断したが、高杯の脚部である可能性も残る。

**石器及び攪乱出土遺物** (図12) 41～44は砥石である。41の石材は砂岩。四面を砥面として利用している。砥石として成形されている。42はチャートを用いる。五面を利用している。41・42は竪穴住居1内の支柱穴37より出土した。43の石材は砂岩で、四面を砥面として利用する。砥石として成形されている。44は片岩を利用している。二面を砥石として利用する。周囲を打ち欠いており、石材と平面形状から石鋏である可能性もある。45は黒色粘板岩を利用した不明石製品である。穴が小さく精巧であることから巡方の一部である可能性が高い。46は白磁碗の底部である。高台は削り出し、内外面は施釉する。鎌倉時代に属する中国製のものと思われる。43・44は竪穴住居1の最上層(埋土1)から、45は竪穴住居1の埋土中層(埋土2)内からそれぞれ出土した。46は近現代の攪乱土内より出土した。

#### IV まとめ

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居2棟・溝6条・ピット38基を確認した。住居2棟はそれぞれ建替えを確認した。特に竪穴住居1に関しては検出面からの深さ0.5mを測る、非常に良好な遺存状態であった。これに対し竪穴住居2は遺存状況が悪く、周壁溝のごく一部と炉と思われる遺構が残るのみである。距離の離れていない二つの住居の差が何に起因するのかは明らかにできなかった。竪穴住居1では一回り小さい古い段階の周壁溝を住居の内側に検出することができた。炉や支柱穴の掘り直しはみられず、新しい住居を作るにあたって周壁を作り替えて住居を広げた例である。貼り床は古い住居の周壁溝周辺でできた高低差を補整する形で一部にのみ施されており、これ以外では地山をそのまま床としていた。床に貼り付くような形で土器が出土し、支柱穴埋土上部からは拳大の自然礫や砂岩とチャート製の砥石が2点、埋置される状況が支柱穴の2箇所で見られた。検出状況からみて住居の廃棄にあたり地鎮めのような祭祀が行われたと考えられる。

出土した土器はすべて庄内Ⅱ～Ⅲ式に属するものである(注1)。図化したもの以外に生駒西麓産の甕の体部片が13片出土した。他地域産の土器の影響を受けた要素もあるが、全体では胎土からみて圧倒的に在産と思われる土器が多くみられた。この地域における庄内Ⅱ～Ⅲ式の土器の一端を明らかにする事ができたと考える。

注・参考文献

注1 國下多美樹「山城地域における古式土師器の様相」『庄内式土器研究XI—庄内式並行期の土器生産とその動き—摂河泉における庄内式について』庄内式土器研究会1995年

高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1990年

吉本健吾・竜子正彦「植物園北遺跡(99RH18)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度京都市文化市民局1999年

平田 泰・モンペティ恭代『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告2007-1 (財)京都市埋蔵文化財研究所2007年



1. 調査区全景（北西上空から）



2. 調査区全景（北西上空から）





1. 調査前全景  
(東から)



2. 竪穴住居1  
完掘状況(上空から)



3. 竪穴住居2  
完掘状況(上空から)



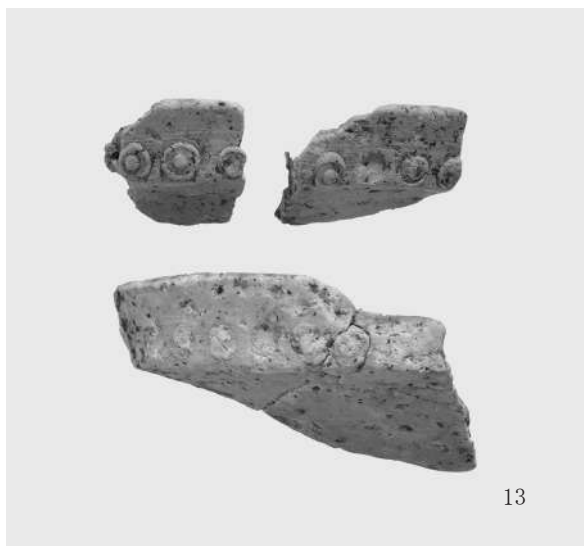
1. 竪穴住居1  
南北アゼ断面（西から）



2. 竪穴住居1内  
支柱穴37 石器41・42  
出土状況（西から）

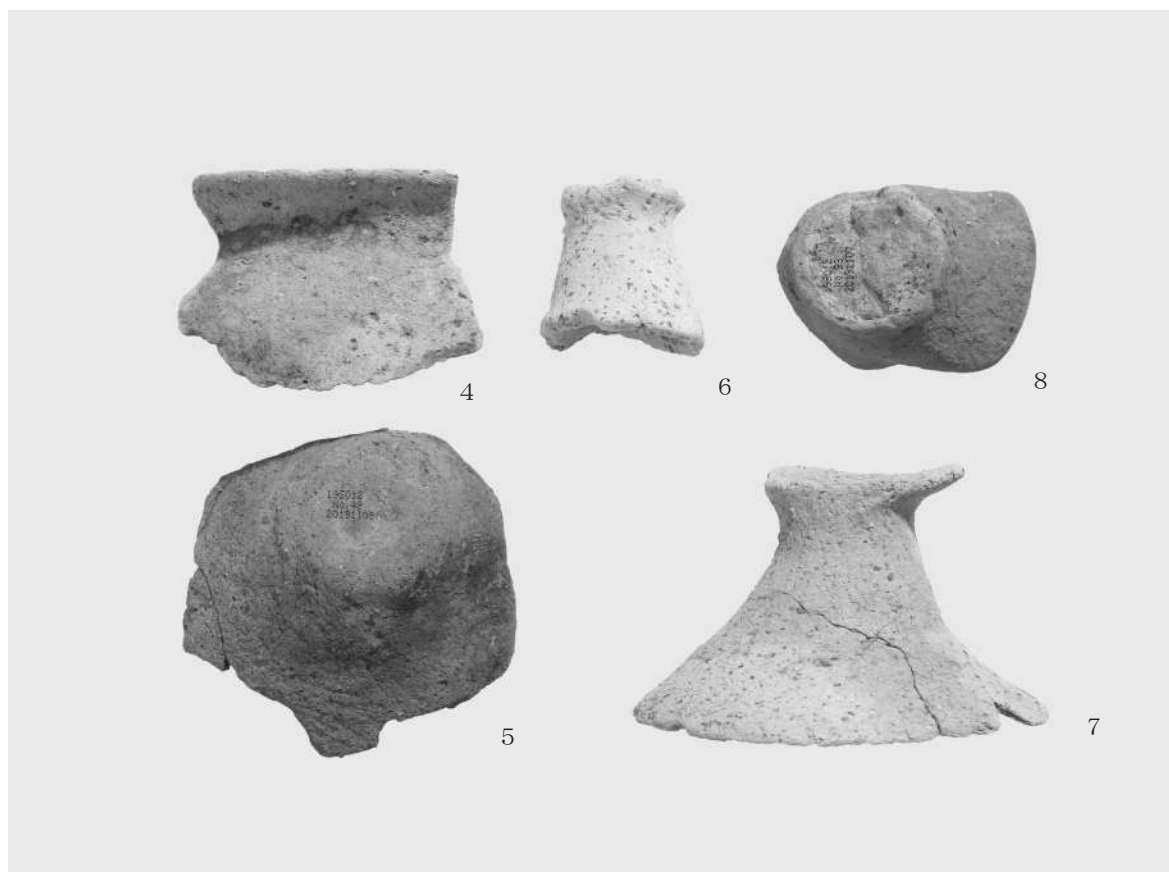


3. 竪穴住居2  
南北アゼ土層断面  
（東から）

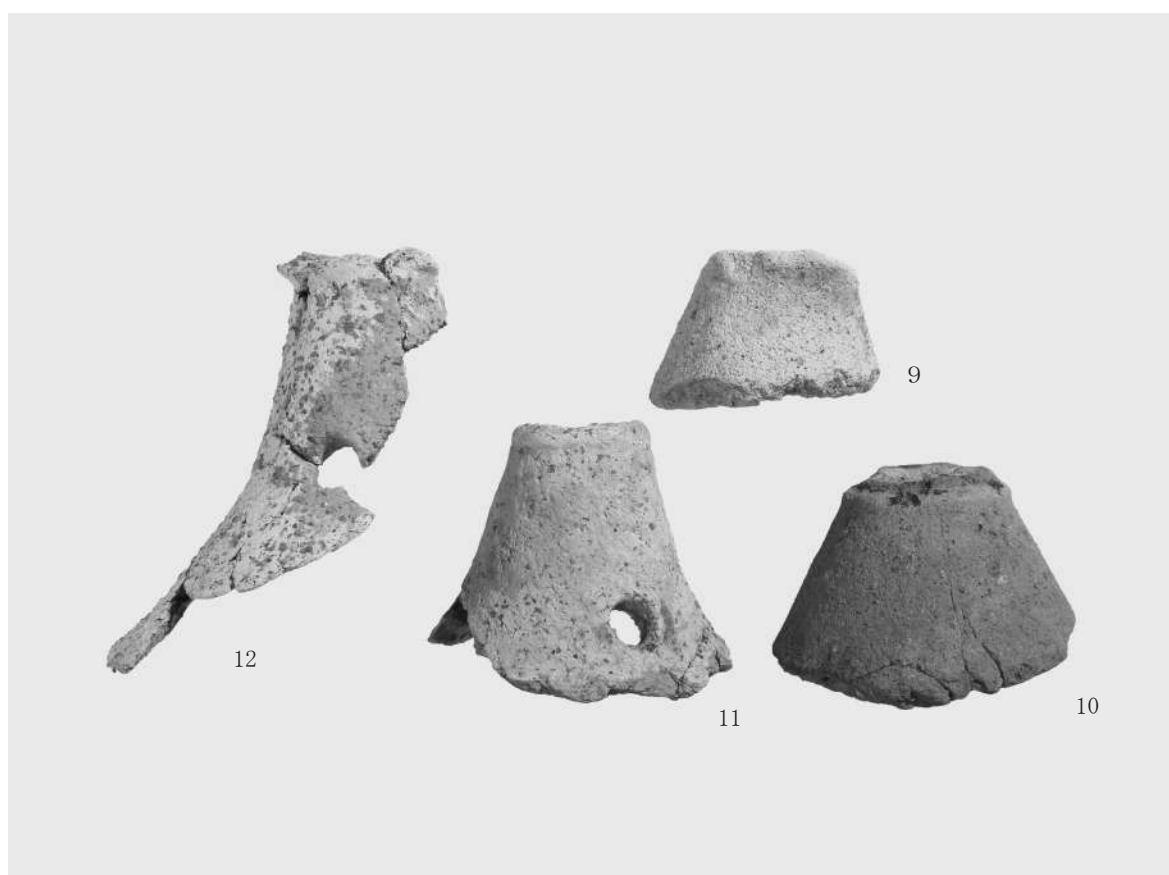


竪穴住居1床面出土土器 (1~3, 13)、埋土内出土土器 (21・22)

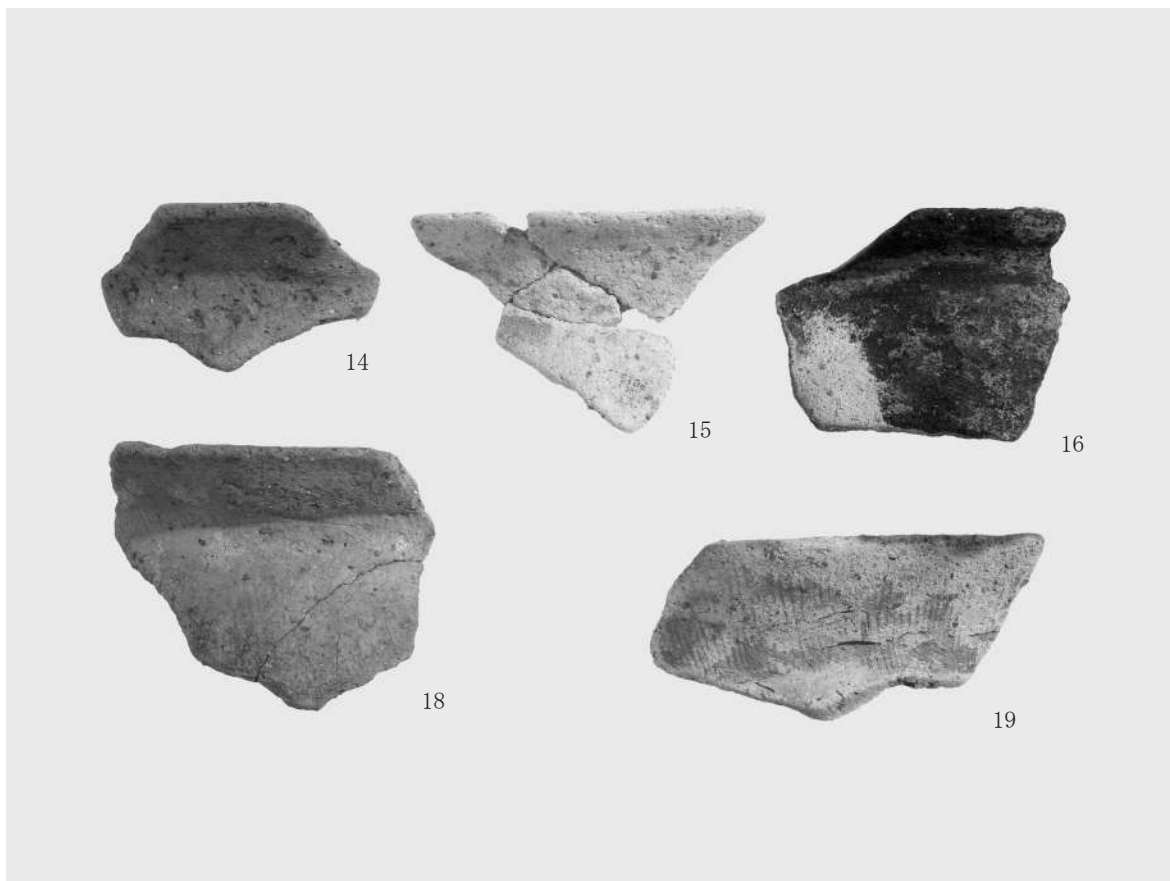




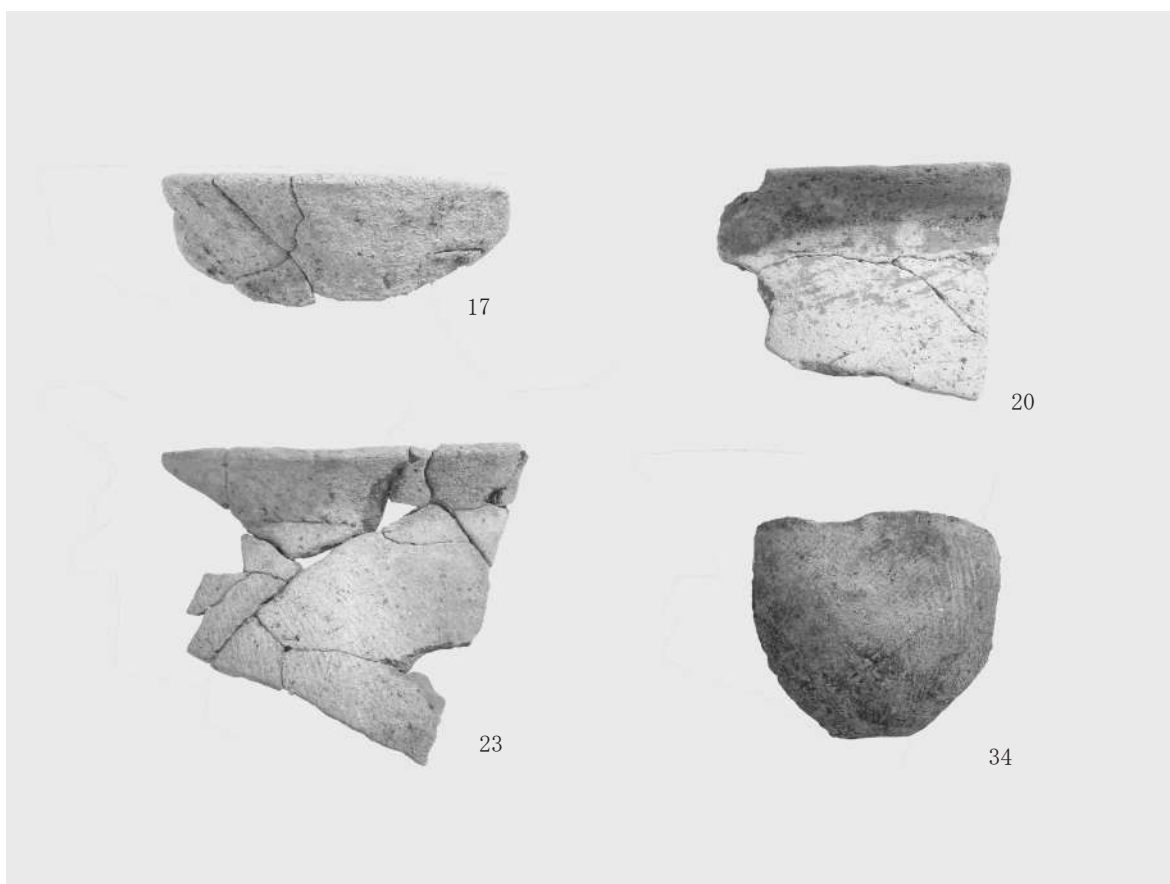
竪穴住居1床面出土土器 (4~8)



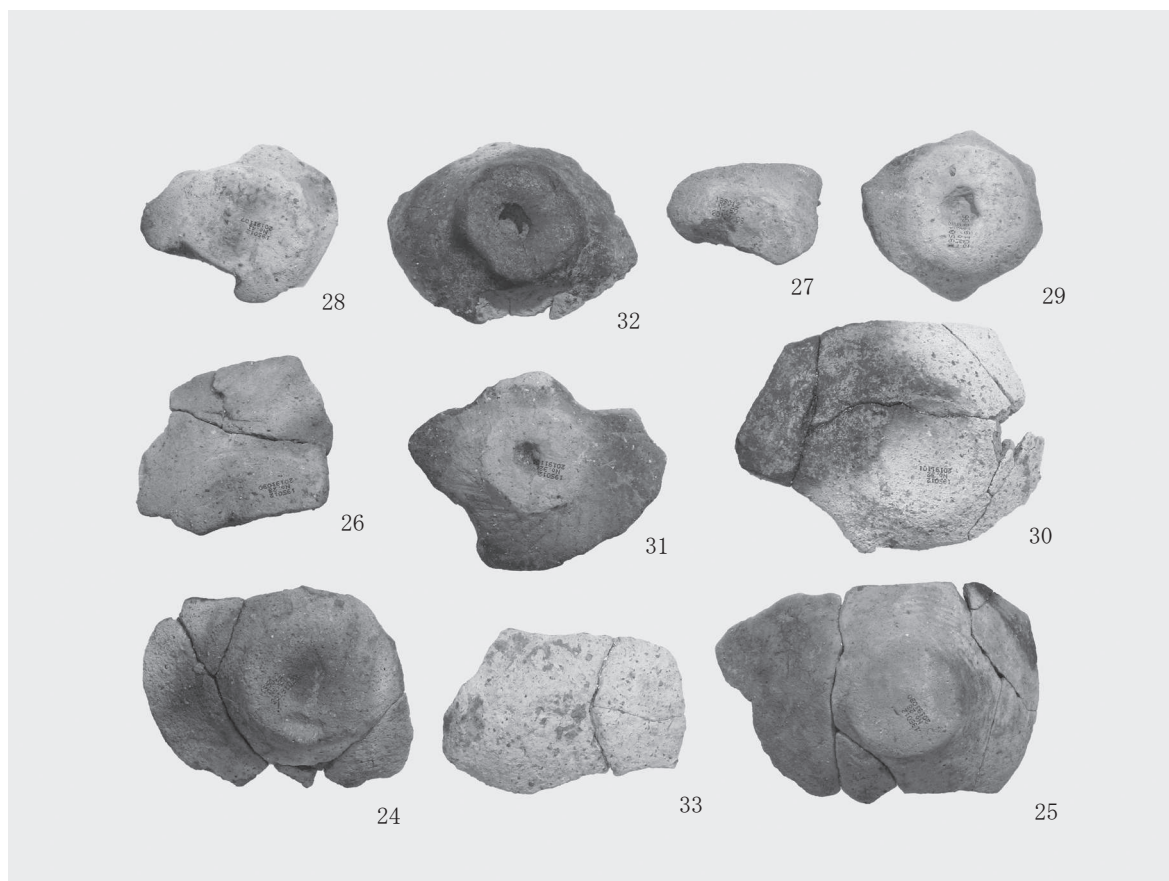
竪穴住居2埋土内出土土器 (9~12)



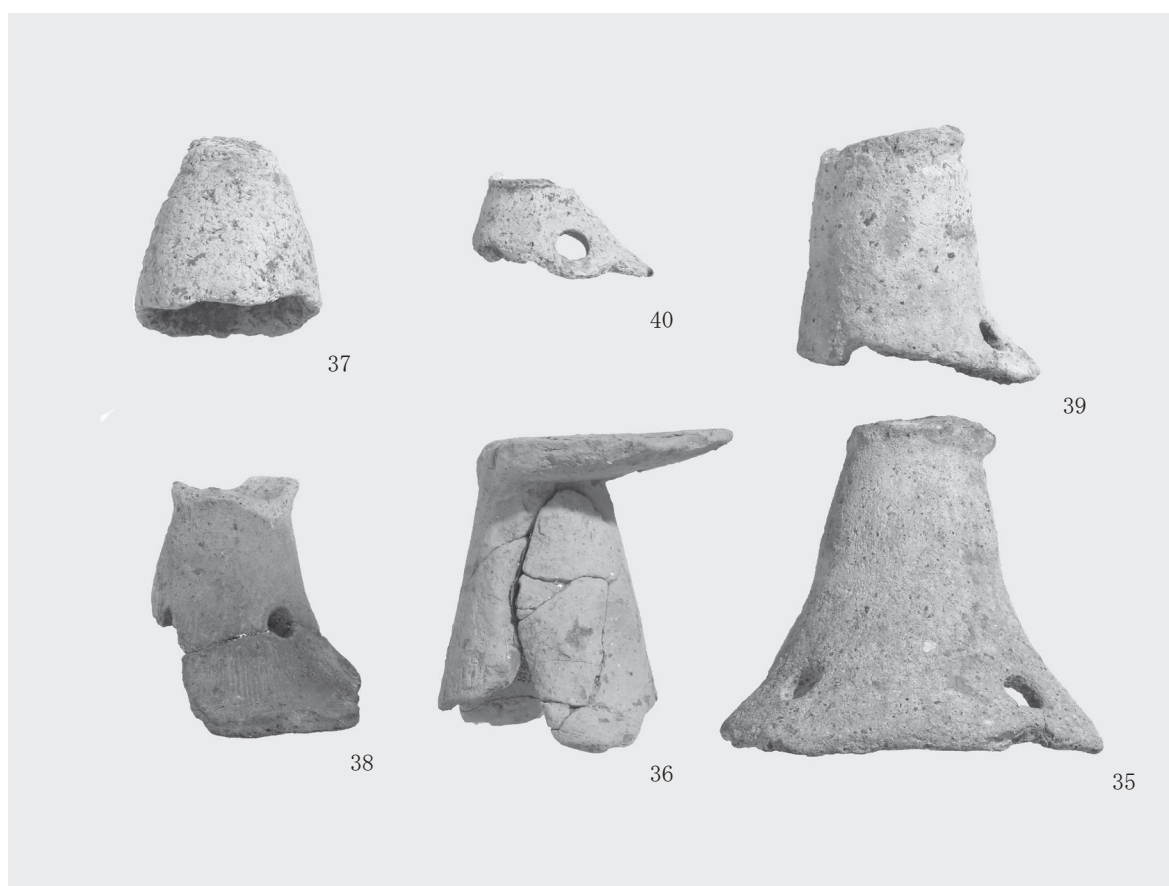
竪穴住居 1 埋土内出土土器 (1) (14 ~ 16, 18, 19)



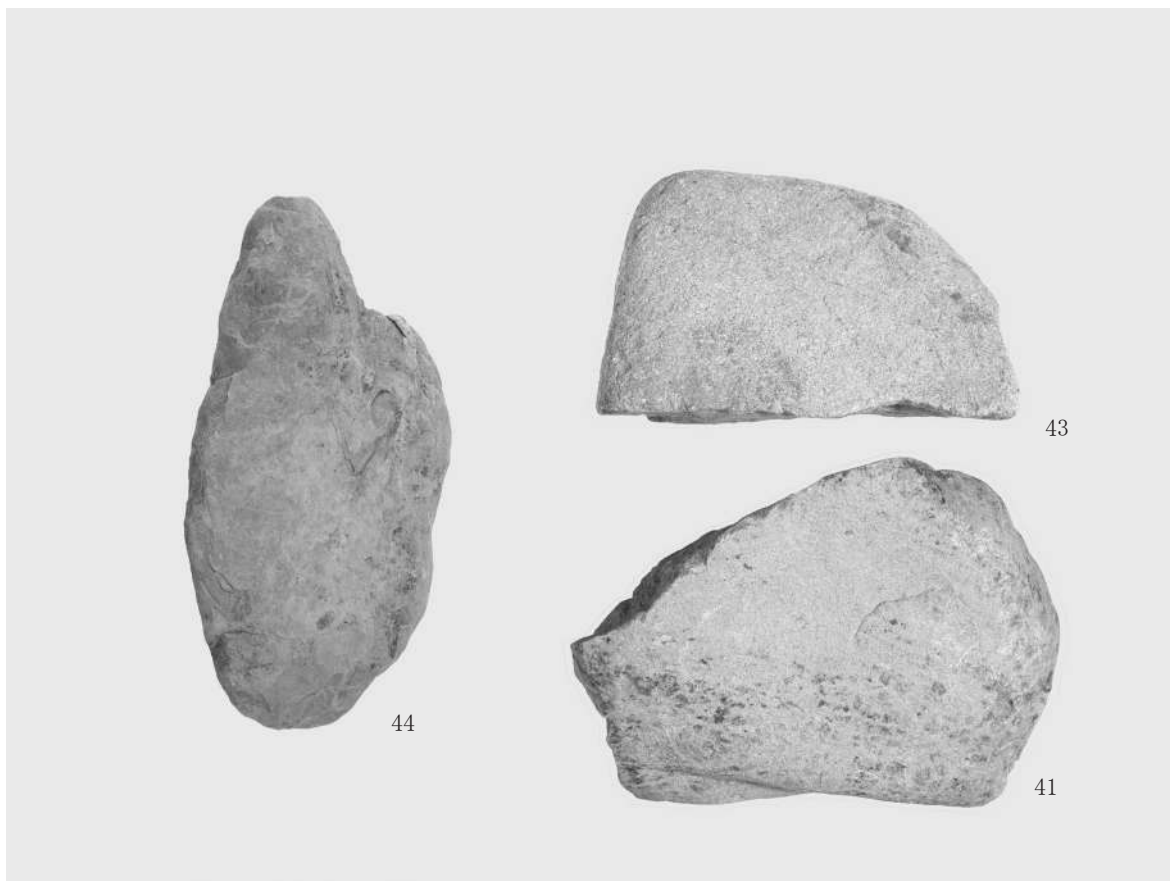
竪穴住居 1 埋土内出土土器 (2) (17, 20, 23, 34)



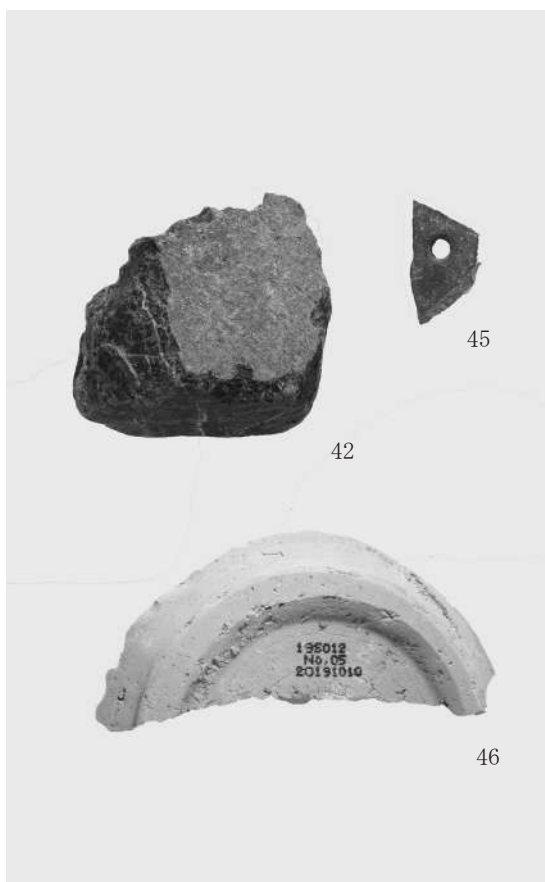
竪穴住居1埋土内出土土器(3)(24~33)



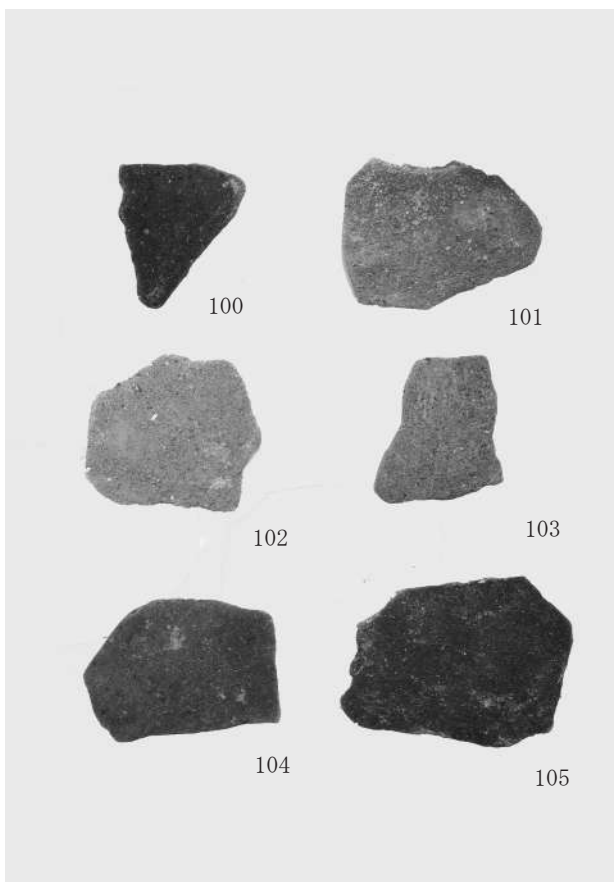
竪穴住居1埋土内出土土器(4)(35~40)



竪穴住居 1 主柱穴 37 (41)・埋土内出土石器 (43, 44)



竪穴住居 1 主柱穴 37 (42)・埋土内出土石器 (45)、攪乱土内出土白磁 (46)



竪穴住居 1 埋土内出土土器 (5) 生駒西麓産甕体部片 (100 ~ 105)

# 報告書抄録

ふりがな	しょくぶつえんきたいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	植物園北遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福永信雄 影山美智与 江崎周二郎							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所							
所在地	〒578-0941 大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号 TEL 072-968-7321							
発行年月日	令和2年(2020)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡	きょうとしきたく 京都市北区 かみがもまつもとちよう 上賀茂松本町 96-1	26100	146	35度 03分 06秒	135度 46分 17秒	令和元年 10月7日 ～11月19 日	約144㎡	老人ホーム建設工 事
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
植物園北遺跡	集落跡	古墳時代 初頭	竪穴住居 溝 ピット	土器・石器		・残存状況の良好な 竪穴住居を検出 ・庄内Ⅱ～Ⅲ式の一 括資料(竪穴住居床 面)が出土		

## 植物園北遺跡発掘調査報告書

令和2年3月31日発行

編集・発行 株式会社 地域文化財研究所  
〒578-0941 東大阪市岩田町1丁目17番9号  
TEL 072-968-7321

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所